

一字一石大乘妙典塔調査報告

新田 和央

1. はじめに (図1)

今回調査を実施した一字一石大乘妙典塔は、南区吉祥院西ノ茶屋町に所在する日向地藏尊内に建立されたものである。当該地は埋蔵文化財包蔵地として周知されていない。

地藏尊の境内整備に合わせ、一字一石大乘妙典塔を移設するとの連絡を受け、地下遺構の存在が予測されたため、調査を実施した。調査は施工前の事前確認を平成30年4月3日に、移設作業に合わせて同年4月13日に、合わせて2度実施した。

日向地藏尊および一字一石大乘妙典塔は幕末に陽泉亭徳翁によって築かれたものであることが塔の刻文から読み取れる。塔の

側面に「安政五年戊午年十月建之 陽泉亭徳翁拜写」と刻まれている。地元有志によってまとめられた『日向地藏尊縁起』では、大乘妙典塔は廃仏毀釈によって一時行



写真1 石塔移設前（東から）

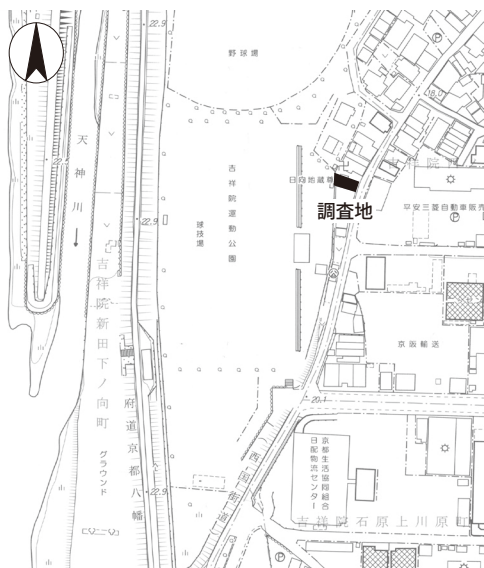


図1 調査位置図 (1:5,000)



写真2 石塔側面刻文

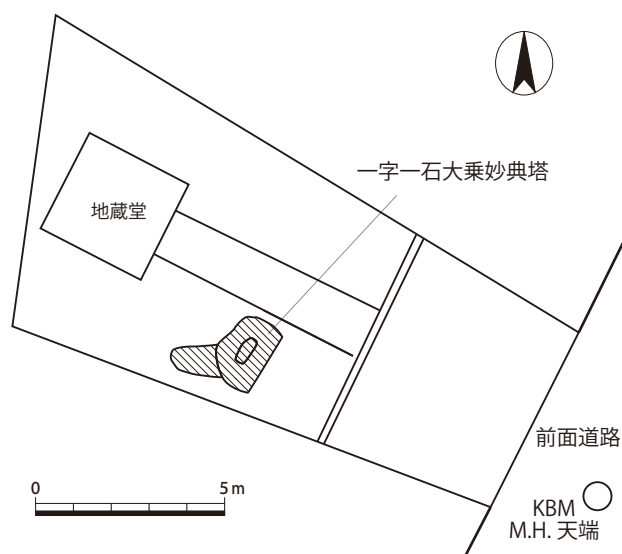


図4 調査地略測図 (1:200)

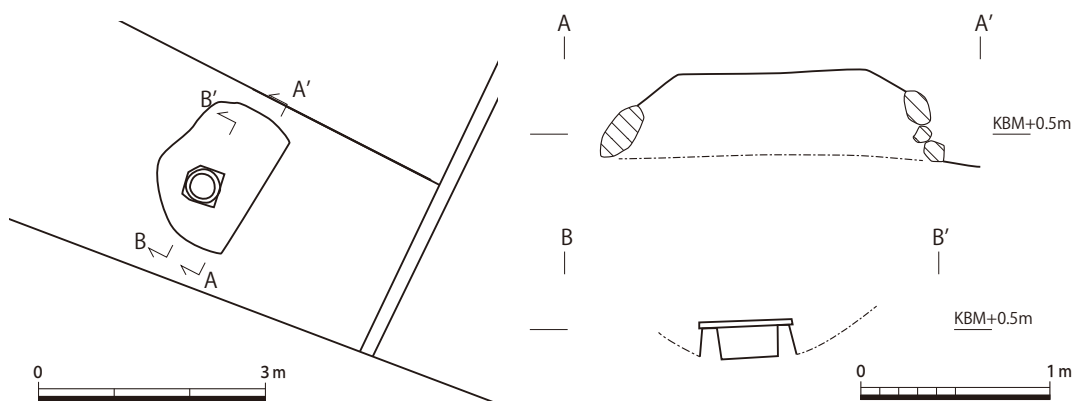


図2 遺構平面 (1:100)・断面図 (1:40)

方が分からなくなっていたものの、昭和4年に経石が発見されたことを契機に大乘妙典塔も発見され、散逸していた経石を再び埋納するとともに塔を元の位置に据えたとする。

2. 遺構・遺物

(図2, 写真2～5)

今回の一字一石大乘妙典塔の移設作業に伴い、塔下部の内容確認を主目的に調査を実施した。塔は小塚の上に据えられた状態であり、塔の移動後、小塚の掘削をおこ

なった。断面の確認および図化をおこなうため、東半を掘削したのち、全体を掘り下げた。頂部から約0.25m掘り下げたところで、金属板を検出し、さらにこの金属板を蓋とするコンクリートの筒状容器を検出した。そのため、蓋上部の土を除去し、蓋を取り外したところ、内部から経文を墨書した礫石が出土した。

礫石には「佛」や「若」,「身」などの文字が一石に一字ずつ記されていることが確認できた。文字が書かれているかどうか定かでないものも含め、計215石が出土した。なお礫石は塔の移設に伴い、即時再埋



写真2 地中容器出土状況（東から）



写真3 経石出土状況



写真4 出土経石（1）



写真5 出土経石（2）

納したため、図化作業はおこなっていない。

3. まとめ

今回出土した経石の総数は215石である。215石全てに1字ずつ書かれているとすれば、文字数も215字である。地元では、経石は明治時代の廃仏毀釈によって、一度行方が分からなくなっていたと伝わっている。これが原因となり、本来の数量ではなくなっている可能性が高く、書かれた経典が何であったのかは不明と言わざるを

得ない。埋納容器は金属板の蓋にコンクリートの容器であり、材質的には昭和4年の再埋納にともなうものと考えて矛盾はない。経石の筆跡には複数人のものが認められることから、安政5年の埋納時点で、この地域に居住していた人々が寄り集まって書いたものと推定できる。昭和4年の再埋納や今回の移設など、地域住民の手によって受け継がれ、今後も受け継いでいくものであり、この地域にとって重要なものであることが、今回の調査で改めて確認できたと言えよう。

新田 和央（文化財保護課 文化財保護技師（埋蔵文化財担当））